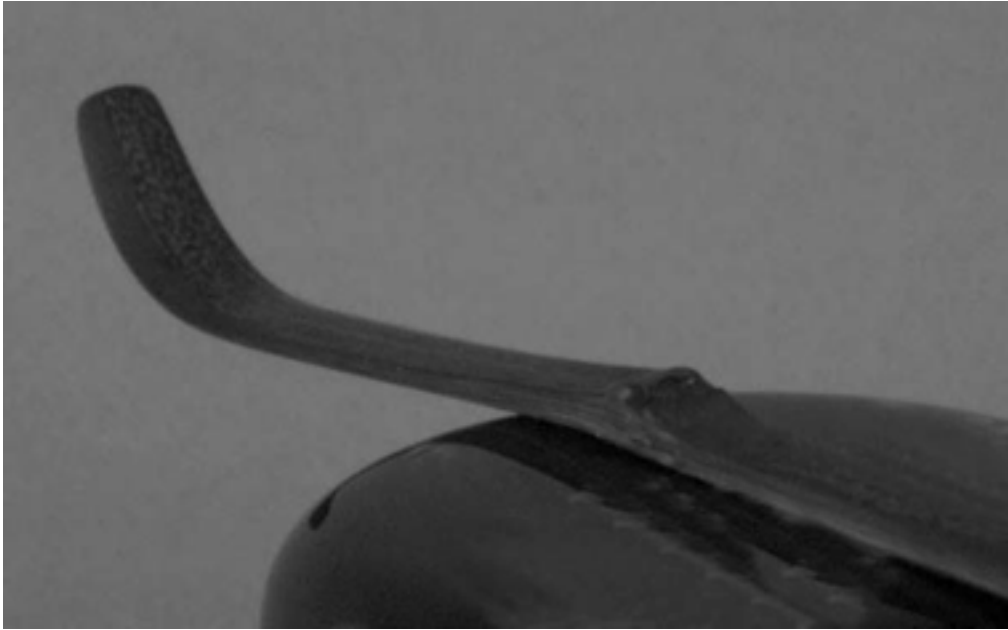


# 竹心写情

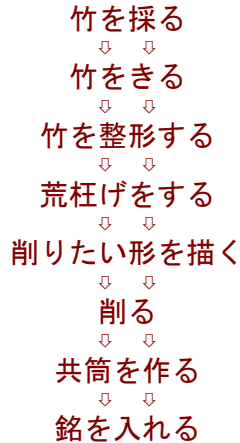
——茶杓を削る——



茶杓は裡から削る。

## <茶杓削りの流れ>

茶杓をつくるには、竹の伐採からはじまりそれなりの課程がある。  
イントロダクションとして、ここではそれらを簡単にのべてみたい。



### ■竹を採る

竹を切るにはその時期がある。およそ11月の末から2月にかけてである。理由は、竹の成長期には伐採した竹に虫がつきやすいということ、水分を多く含みすぎていることなどが挙げられる。切った竹は日の当たらない場所に半年以上寝かせ、含まれている水分を蒸発させる。ほどよく寝かせた竹は油ぬきをする。業者では炭を使って行うようだが、家庭ではガス台でもかまわない。熱すると油が滲み出てくるので、それを布で丁寧に拭き取る。油ぬきした竹は、数週間天日干しにした後、また数ヶ月から数年寝かす。これで茶杓に使えるような竹ができる。煤竹の場合は、煤落としをする必要がある。これも火で焙ると落としやすい。

### ■竹を切る

この行程では、茶杓用にできあがった竹を切ることになる。茶杓は標準形の18.5センチとする。順樋、逆樋は作者の好みで使えばよいだろう。節を中心として適当な長さに切断する。丸のまま切断した竹は、鉋を使って割っていく。幅は2センチほどでよい。節裏の節もこの際にきれいに落としておく。竹は順樋、逆樋と2本が採れる。

### ■削る準備をする

割った竹は、杓げやすく削りやすいように裏全体を平に整形する。その後に水を入れた容器に浸けておく。竹が十分に水を吸った頃、鍋などでよく煮て柔らかくする。竹の種類によって煮る時間は異なる。柔らかくなった竹を今度はろうそくを使って杓げる。杓げ軸部分を裏表よく焙り、撓め用の道具でゆっくり杓げていく。ほどよく曲がったところで水につけて冷やす。これで曲がりに戻ることはないが、念のために紐などで固定しておく。全体にすこしアーチ型にしたい場合は、この段階で型枠に固定し、乾燥させる。季節にもよるが、5日間もすれば荒杓げの完成である。

### ■削る

荒杓げが終わった竹に、削りたい茶杓の姿を鉛筆で描く。この時、きっちりと寸法を図ることをおすすめする。およそ節上から露までは7センチから8.5センチ。おっとり10センチ前後。櫛先は2センチ前後だろうか。線引きが終われば、削っていくことになる。台を使い、よく研いだ切り出しを使って削る。けっして細いほうから太い方へは削ってはいけない。必ず太い方から細い方へ。茶杓削りの鉄則である。形が完成すればヤスリを使ってきれいに仕上げる。満足できれば切り止めと櫛先に一刀づついれて完成である。

### ■ 共筒をつくる

共筒は、準備さほどだが茶杓を削るより時間がかかる。丸のままの竹を使うわけだが、上下がある。根っこのほうが蓋側に位置する。もちろん、作者の意図によりその逆もある。共筒の長さは茶杓の長さ、蓋の呑み込みによって変わってくる。通常、長さ約20センチ強くらいだろうか。蓋との合わせ目は胴と垂直になるように切る。またが波をうっているとう蓋との合わせ目にすき間ができるのでまっすぐに切る必要がある。切ったあとに粗めのヤスリをかければよい。蓋は正柾目の杉の赤身の部分を使う。筒の正面と木目が平行になるのが常である。さて、こうしたことに考慮し、1辺3.5センチほどの杉の角材を用意する。角材に蓋の頭部と呑み込みの寸法を線引きする。寸法は好みでよい。次に筒となる竹を切る。蓋との合わせ目の部分は少し長めに切り、余分に約0.5～1センチほどの輪切り状のものを作っておく。これが後に呑み込みの径の基準となる。木目の位置に注意し、角材に輪切り状の竹を当て、内径を鉛筆で印をつける。蓋の頭部と呑み込みの接点を鋸で切る。この場合、さきほどの呑み込みの口径までの切れ込みとする。切れ込みを入れたら刃物で口径以外の余分な肉を落としていく。印のところまで落としたら筒に入れてみる。入らなければ、再度、余分を落とす。入れば呑み込み作りは完成である。つぎに蓋の頭部だが、ここは真・行・草の作り方によってことなる。いずれにしる筒の太さに合わせて、ノミまたは刃物でこれも切り落としていく。全体の形ができあがれば、銘を書けばよい。

## <茶杓削りのための準備>

竹の裡にいかにか茶杓を看るか

### CONTENS

- 必要な道具
- どんな竹を選ぶのか
- 削るときのサイズ
- 下削りをする
- 水に浸けて、煮る
- どうやって曲げるのか (撓めるのか)

### 1 必要な道具

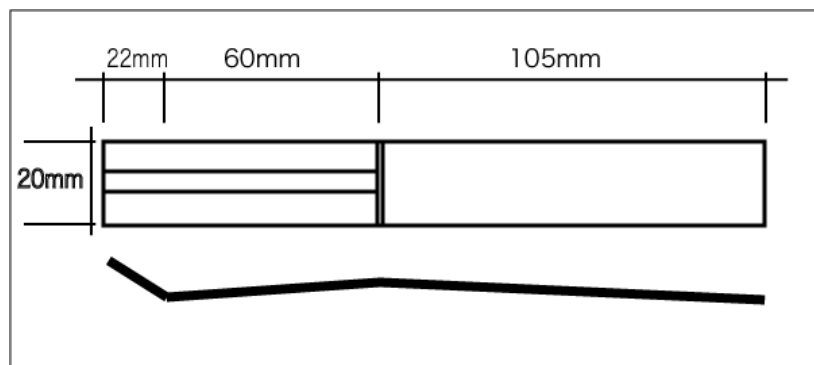
- 定規
- ボール(水を入れ、曲げの時に使うものなのでが広く深いものがよい)
- 胴付鋸(目の細かいピラニア鋸など)
- 曲げるための道具
- 切り出しナイフ

### 2 どんな竹を選ぶのか

茶杓は村田珠光からはじまり、利休の草形を極みとして多くは竹材で作られている。なかには象牙や樹木を素材としたものもある。使われる竹としては苦竹(マダケ)、雲紋竹、皺竹(シボチク)、は竹、きんめい竹などが適材で、さらに煤竹、ごま竹、実竹(じっちく・じつたけ・みだけ)などが用いられる。詳細は後述するとして、いずれを使うかは作者の意図するところや入手材料によるだろう。竹材の入手方法としては、近くに竹藪があれば所有者に断って伐採することもできるが、街中であればそうはいかない。竹材店やホームセンターなどで求めるのが早道だろう。珍しい竹や景色のよい竹が入手できれば作者としてこのうえない悦びである。通常、よく見られる白っぽい竹は、白竹といって竹の油を抜き、数日間天日に晒したものである。晒竹ともいう。なお、荒曲げしたものは茶道具店などで購入することも可能である。曲げは無理と思うのであれば、こうした成形された竹を購入するのもいいだろう。

### 3 削るときのサイズ

竹選びが終わったら、枉げのための準備にはいる。はじめに1本の長い竹を切るわけだが、竹の景色——樋の具合、削げ、模様など——を見定めて切ることになる。



初心者はいわゆる標準形を作るのがいいだろう。ここでは18センチ前後の茶杓をつくることにする。節下(おっとり)は約10センチほどにする、切断時はそれよりやや長めに寸法(10.5-11センチ)をとる必要がある。露(櫛先の最先端)から節までが

8センチ。枉軸から露までは2センチとする。

#### 4 下削りをする

前段で節上が全体長から節下を差し引いた長さの竹片ができあがる。茶杓になる前のもっともはじめの形だ。これを下削りするわけである。竹片の裏面は、竹に丸みがあるためm字形になっている。m字のままだと枉げづらく、きれいに枉げられないので、櫛先の裏部分と枉軸あたりを平らにする必要がある。枉げやすく、のちに削りやすくするために下削りは重要な作業なので心して臨みたい。

#### 5 水に浸けて、煮る

乾燥している竹は、そのままでは曲がらない。そのために水に浸け、十分に水分を含ませる必要がある。適当な器（大きいペットボトルが重宝）を用意し、水を張って底に沈むまで数日間浸けておく。これで竹は水をたっぷり吸収し、多少柔らかくなっている。この段階で枉げる人もいるが、煮沸しさらに柔らかくすると、枉げるときに好結果が得られる。ただし、煤竹を煮ると色が落ちるので要注意。

#### 6 どうやって曲げるのか（撓めるのか）

##### ■櫛先を形成するための曲げ

節から6.3〜7センチあたり（流派によって枉げの角度が異なるので、調整が必要）の枉げたい部分の裏に鉛筆で印をつける。そこが枉げるときの目安となる。枉げ軸を裏、表と丹念に熱する。すると水分が蒸発し、その部分が白っぽくなる。枉げ時である。力をいれずじわりじわりと枉げていく。均等な力で美しいカーブがでるように、急がずゆっくりと枉げていく。あせってはいけない。求めるところまで枉げたら冷水に浸ける。鉄の焼き入れと同じで、急激に冷やすことでもとに戻らないようにするのである。

##### ■固定する

さて、枉げた竹はよく水分をとることも必要だが、湿り気が残っているので、枉げがもとに戻らないように固定し、乾燥させる必要がある。方法としては紐で櫛先を固定し、戻らないようにすることもひとつの方法である。これは各自工夫するといだろう。

##### ■枉げるための道具

手で枉げることのできるよう、余裕のある長さにあらかじめ切っておけばそれに越したことはない。が、景色の具合や竹の長さによってそうもいかないときがある。そうなるとう専用の道具の出番である。木などの材質で、自分の使いやすい道具を作るとよい。これもアイデアのだしどころである。

## <茶杓を削る> 刃物への慣れが美しいラインを創る

### CONTAINS

- 必要な道具
- 作りたい茶杓のかたちを描く
- 櫛先から切り止めへ削り下げる
  - 裏を削る
  - 磨く
- たましいを入れる

### 1 必要な道具

- 切り出しナイフ
- 胴付鋸(目の細かいピラニア鋸など)
- ヤスリ(中目・細目)
- 定規
- 万力
- ノギス
- 削り台

### 2 作りたい茶杓のかたちを描く

茶杓作りの準備が終わり、いよいよ削る段階に入るわけだが、きれいに削るためには茶杓の姿を竹片に描いた方がいいだろう。これは削るときにつねに形が想起できるからである。とくに初心者には勧めたい。

#### ■ 櫛先の長さを決める。

前述したように全長18センチ前後の標準形の茶杓を削る。櫛先の長さは、標準形ではほぼ2センチとなる。まれに1.9〜2.2センチのものもある。それは全体の姿をみてその寸法を決めているからだと思われる。今回は標準形ということで、櫛先は2センチとする。枉軸から露にむかって2センチ強のところに印をつける。

#### ■ 節から切り止めまでの長さを決める。

つぎに節から切り止めに向かって約10.5センチのあたりに印をつける。印をつけ終わったら不要な部分を鋸で切り落とす。

#### ■ 全体の形を描く。

つぎに全体の形を鉛筆で描いていく。まず茶杓の中心線をだす。そして、それぞれ下記の寸法を記していく。

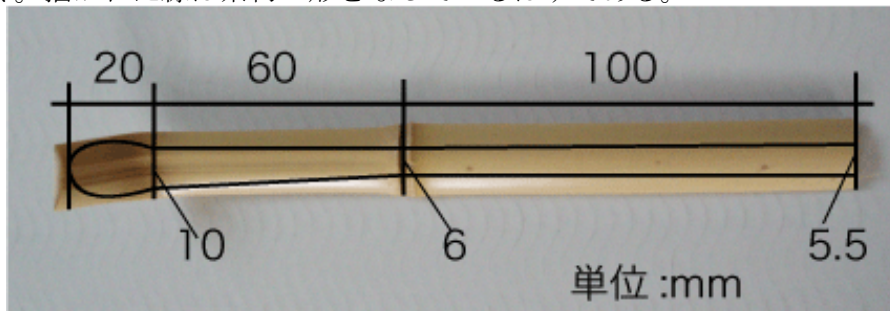
切り止め部分 5.5〜6ミリ

節部分 6〜6.5ミリ

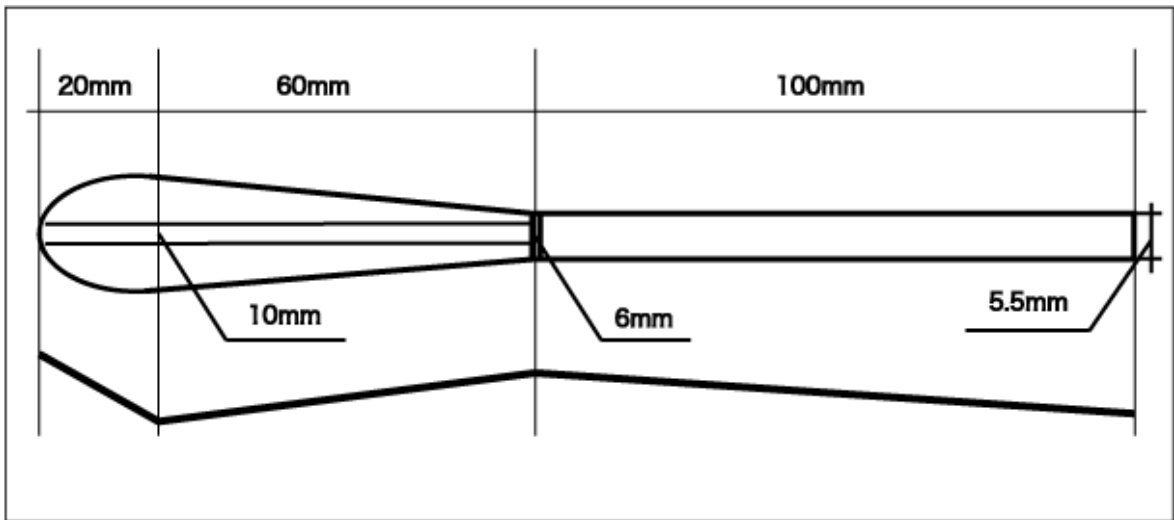
枉軸 9.5〜10ミリ

櫛先の中央 10.〜10.7ミリ

印をつけたら定規でこれらの点を結ぶ。もちろん櫛先もフリーハンドで美しい丸形を描いておく。描かれた線は茶杓の形をなしているはずである。







### 3 櫛先から切り止めへ削り下げる

全体の姿を鉛筆で描いたなら、線にそって削り下げていく。基本として太いほうから細いほうへ、つまり枉軸から切り止め、枉軸から露へ向って削ることを守ってもらいたい。



### 4 裏を削る

ある程度茶杓の形ができたなら、今度は裏の削りである。この形も代表的なものとして利休形と石州形のふたつがある。切り止めの断面をみるとわかるが、利休形は舟形で、石州形は直角切りといって長方形になっているはずである。ここでは利休形に削る。

■ 櫛先裏はゆったりと丸みをつける。

櫛先の裏は薄すぎず、厚すぎず、適度な厚みを残すようにする。

■ 船底に削る。

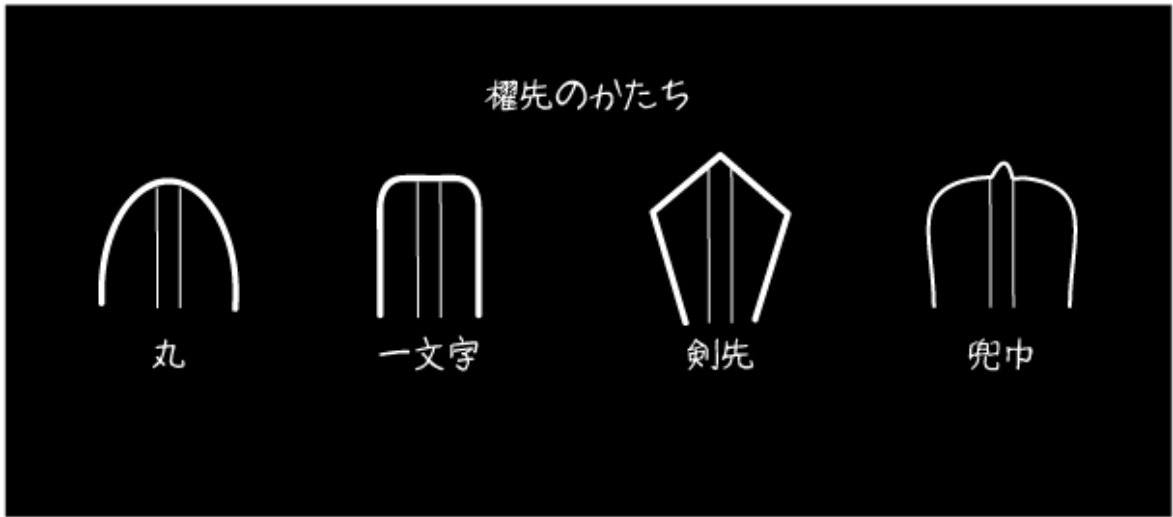
■ 櫛先以外は船底に削っていく。この時、中心から左右1〜1.5ミリは平らに削る。

■ 節裏を削る。

節裏の削りは順樋と逆樋では異なる。順樋で節の高い場合は、利休の茶杓にみられるような蟻腰、雉股を削ることができる。

■ 露先は美しく仕上げる。

茶杓づくりにはいくつか重要な箇所があるが、露先もそのひとつである。したがって慎重に仕上げていきたい。露先には代表的な形として5パターンがある。いわゆる丸形、剣先形、一文字形、兜巾形、蓮華形である。



## 5 磨く

本来ならすべてナイフ1本で削っていくのだが、慣れないうちは難しいのでサンドペーパーを使う。これも磨きすぎないようにしなくてはいけない。權先だけは袱紗がひっかからないように磨くこと。

## 6 たましいを入れる

すべての削り、磨き終わっても、これで終わりではない。權先裏を八文字に切り込みをいれ、最後に切り止めを決める作業が残っている。これは茶杓にたましいを入れる大切な作業である。これによってはじめて茶杓が完成するのである。切り止めの形もやはりいくつがある。これも露先と同じように、茶杓全体の形と相対であるので、もっともふさわしいものを選ぶ。利休形は裏表両脇の四刀となる。

以上で「茶杓削りの作業」は終わりである。いかがだろう、美しい姿の茶杓はできただろうか。これも数をこなしてはじめて納得のいく形ができあがると思う。はじめて削ってうまくいかなかったとって嘆くことはない。失敗はつぎのステップを上げるための階段だと思えばよい。次に削るときはいちだんと上達しているはずである。難しいところ、分からないところは、茶杓を削りながら、すこしづつ削り落としていくしかないように思える。

### ■削るときの要注意

細い方から太い方へは削らない。  
描いたラインより内へは削らない。

### ■削り台見本





あくまでも見本なので、削りやすいものを誂えればよいでしょう。

## 〈筒の作り方〉 共筒は鋸の扱いで決まる

茶杓づくりは、  
茶杓を削るだけでは終わらない。  
やはり筒に収められてこそ、  
はじめて道具として完成する。  
この筒——。  
茶杓を削るより手間がかかるし、また難しい。  
それだけにやりがいがある。  
生まれるのである。

茶の湯を嗜んでおられる方ならご存じだろうが、筒は「真」「行」「草」の三つの形態にわかれる。「真」は皮をすべて削いで、丸くきれいに仕上げたもの。「行」は上下を縞削りに削ぎ、「草」は自由に変化をみせて削ったものだ。

また、筒には共筒、追筒(極筒)、替筒の種類がある。共筒は、茶杓と同一の作者が作ったもの。追筒は筒が存在せず、裸のまま伝わった茶杓に、後世の人が筒を作って保存したもの。そして替筒は、共筒が痛まないように替えを目的に作ったものである。

ここでの筒づくりは、中節の茶杓に合うように「草」の筒を作りたいと思う。

### 1 筒を作る

#### ■材料を選ぶ

筒材は、一般的に白竹が多く用いられるが、茶杓同様に煤竹、ごま竹、皺竹…などの材質も使われる。何を選ぶかは作者の感性によると思う。

また基本的には竹の生えている状態とは逆——根方向が上向きになる——に用いるが、順で使うか、逆で使うかも考慮の対象になる。

筒材の太さだが、当然茶杓が入るだけの口径が必要である。櫛先の長さを約2センチとすると枉げが急なものは、それだけ口径が太くなり、ゆったりしたものは多少細くなくてもかまわない。こう考えると1本の竹の中でも先端部分は筒材に向かないということになる。

さらに筒の長さだが節から節までの間が短いと茶杓が収まらないので、たとえば茶杓長が18センチ前後であれば節間は20センチ以上が必要であることも考慮しておきたい。こうしたことをすべてふまえた上で筒材を選択する。

#### ■竹に寸法を書き込む

上記の事柄を考慮した上で、白竹で筒を作りたいと思う。

茶杓は「茶杓を削る」の項で述べた中型約18センチとする。筒に使う竹の内径は1.7〜2センチくらいのもを選ぶ。

竹は底辺(節のある部分)から測って22〜23センチあたりのところで切断する。長さを測る場合、細い棒状のものを内に差し込んで測るとよいだろう。これは底辺の節部の厚さがあるので、外側から測ると弱冠の誤差が生じるからである。

竹を適宜な長さに切り終えたなら、今度は実際の筒の長さに切るために印をつける。茶杓の長さが18センチ、蓋の呑み込みが1センチとして約19.2センチあたりに印をつける。2ミリの誤差があるが、これは鋸の厚さを考慮してのことである。印をつけたら大工道具である毛挽きで印をつけると浅い溝ができ、鋸を挽くときに導線となり、きれいに切れ目を入れることができる。もちろん、紙テープで線を引くのもよいが、便利なのはフィルムである。厚みがあり、材質がしっかりしているので何度でも使える。フィルムの天地をあわせてくると2重ほど巻き、濃い鉛筆で線を引く。これでまっすぐな線を引くことができる。

#### ■鋸を使って切断する

鋸は後述する蓋を作るときにも便利な目の細かい胴付鋸がよい。切るときに刃がぶれないからである。

竹は台の上にしつかりと置き、線に添って手前に回しながら切る。手元がよく見える明るいところで作業を行わないと、切り口がズレてくるので注意したい。ズレると切り口

は凹凸になり、後の作業が面倒になる。なるべく力をいれずにまっすぐに鋸を挽くのがコツである。

切り終えたなら、一度鏡に当ててみる。鏡は面がたいらなので凹凸がないかを調べるのに都合がよい。当ててみて凹凸があるようなら鏡の上にサンドペーパーを置き、円を描くようにゆっくりとこすっていく。ある程度、こすったらもう一度鏡に当てて確かめる。これを数回行えばほぼ切断面は平らになっているはずである。切断面が直角になっていないと蓋との合わせ目にすき間ができる。とことんこだわる必要がある。

さて、切り終えた竹には2〜3センチ幅の切り落としができるはずである。これは蓋づくりのために取っておく。

## 2 蓋づくり

蓋の材質は主に杉の赤身の部分がいられる。わけても四角の角材を横から見て、どの面にも縦に柀目が通っている四角正面柀の材を使うのがよい。赤杉は容易に手に入らないが、銘木店などで頼んでおけば木っ端を譲ってもらえる。また知人に指物師や建具師がいればお願いするのも手である。

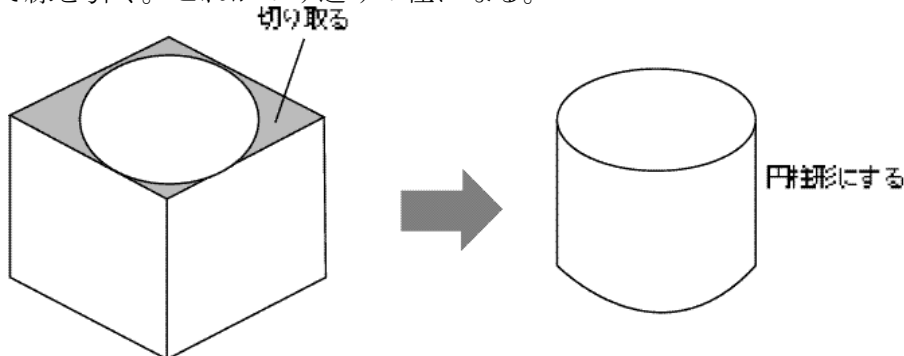
3センチ四方(筒の太さによってかわる)の角材を用意したら、切断面を刃物で薄く削ぎ、きれいな木目をだしておく。削ぐのが無理ならヤスリなどを使い、とにかく木目ができるように面を美しく仕上げる。

### ■ 寸法を描く

「のみ込み」の寸法は約1センチ前後。文献をしらべてもおよそこれくらいの寸法である。また、蓋の頭部は1〜1.4センチ前後に取る。どちらも寸法に決まりはないので、筒とのバランスを考え作者のセンスでよい。

寸法が決まれば角材の四隅を落とし、円形または楕円形を作る。この時に角材にこれ以上余分を落とさないように筒の外径も記しておく。作業ではなるべく円柱にするようにする。台形推になると線を引くときに正確に描けないからである。

円柱形ができたならフィルムなどで使ったのみ込み、頭部と順次にぐるりと線を引く。つぎに筒の寸法取りでできた竹の切り落としをのみ込み部分の底面にあて、内径をぐるりと鉛筆で線を引く。これがのみ込みの径になる。



### ■ 鋸で挽く

先ほど引いたのみ込み、頭部の線にそって鋸を入れていくわけだが、万力を使うと材が動かず切るのに便利である。慣れないと鋸がぶれ、材に対して垂直に切れないのでよほどの注意が必要である。まっすぐ垂直に切れていれば、筒との合わせ目もぴったりといく。そうでないとどうしてもすき間がでる。ここが共筒作りのもっとも難しいところではないだろうか。

切れ込みの深さは、基本的には筒内径の太さまでである。薄い紙などを差し込んで確認するのもよい。多少、食い込んでも問題はない。古い共筒の中にはのみ込みの太さより深く切つてあるものもある。

### ■ のみ込みを作る。

切れ込みが終わったら、先ほどののみ込みの外径を書いた線に添って、切り出しナイフで落としていく。外径線のところまできたら、筒に当てて確認する。入らなければ、さらに不要部分を落としていく。ただし不要部分を落としていくときに、鉛筆の芯の太さ分だけ実寸より小さくなっているので注意しなくてはならない。鉛筆は濃いもので、芯はなるべく細く削っておいた方がよい。

筒との合わせ面とのみ込みとの直角部分はきれいに処理しておく必要がある。すこしでも削ったカスが残っていると、たとえ筒に入ったとしてもピッタリとはいかないの注意する。

さて、合わせ面がすき間なく合って、のみ込み作りは完成したことになる。少しきついかかなと思うくらいが蓋としてはよい。切り落とした後は、けっしてヤスリはかけてはいけない。木目がぼけてしまうことと、ヤスリをかけた分空きができてしまうからである。

さて、のみ込みはできたが、頭部はまだ四角いままである。これはこのまま残し、筒を削るときに同時に削ることになる。

蓋作りはとにかく難しい。ひとつ蓋を作るごとに、合わせ目のすき間が埋まってく、そんな経験と努力が必要な作業である。

### 3 筒を削る

筒の削り方は、前述したように大まかに3通りに分けられる。すなわち「真」「行」「草」がある。ここでは「草」の削りを行なうので、表皮を一定には削がない思いのままの削りをする。銘を記す正面をある程度の幅をもたせてノミで削ぎ取る。筒を手に取り、よく見済まして削らなくてはならない。幅や太さは景色の善し悪しによるため、具体的な数値は表すことができない。

正面が決まれば思うままに両端の表皮を削いでいけばよい。蓋の頭部もこのとき筒の外口径にあわせていっしょに削り落としてしまう。美しくできれば完成である。

### 4 仕上げ

筒、蓋共に表面ができあがれば、最後の面取りとなる。これも決まりがあるわけではない。六面、八面などあるが、環状のものもある。筒にあわせて、それにふさわしい形に削りあげるのがよいと思われる。

表面に美しく木目をだすには、刃物で削ぐのがもっとも美しい。それには、とにかく刃物をするどく研ぐことである。そして、薄皮をめくるように削いでいく。

また、ほかにもヤスリで磨く方法や、建具屋や指物師が使う「ウズクリ」を使う方法もある。これは各自が好きな方法をとればよい。

### 5 銘をいれる

筒と蓋が仕上がれば、最後は銘である。これも簡単に決まる場合もあれば、長年決まらない場合もある。素材にちなんだもの、贈り主にあわせたもの、歌銘・・・など、銘になるものはさまざまである。これも作者のセンスがひかる作業のひとつである。

銘を書く場合、墨が竹の繊維にそってにじむことがある。この場合、書く前にチョークを塗っておくとにじみがなくなるので、覚えておくとよい。また、墨を濃くするのもひとつである。

以上で「共筒」作りの行程をひとつおりの説明したつもりである。しかし、作者によって作り方はさまざまである。これがいい、これは悪いというものもないので、もっとも作りやすい方法で作るのがよいと思われる。いつくも作っているうちに新しい方法を会得するかもしれない。これまで述べてきた方法がその参考になれば幸いである。

## <刃物を研ぐ>

茶杓削りの基本にこれがある。

刃物を使うモノづくりにおいて、当然だがよく切れることは大前提であり、もっとも重要なことである。それは、茶杓削りにおいても当てはまることである。コンマ何ミリという削りを行うときに、切れない刃物ではこの作業は不可能である。すると厳しさが求められず、姿のあまい茶杓ができあがるのだ。

刃物が切れること。これも茶杓削りを行う上での下準備といえるだろう。削っている途中でも、刃のひっかかりが悪くなればすぐに研ぐ。この気持ちはつねに持っている欲しいものである。

簡易研ぎ器などもあるが、刃先や刃元はどうしても研ぎ残しができ、大切は刃をなくしてしまうことにもなる。できるだけ砥石を使って研ぐことをお薦めしたい。

### 1 砥石について

砥石には天然のものと、人造のものがある。さらに、それぞれ目の細かさによって「荒砥」「中砥」「仕上げ砥」と分けられている。天然砥は材質の柔らかさに加え、減りが少ないという利点があるが、かなり高価で数センチ四方で何万円というものもある。できれば天然物が良いだろうが、一般の家庭では安価な人造砥石でもかまわないと思う。ホームセンターなどで市販されているものの多くは、この人造砥石である。

人造砥石の目の細かさは数値で表されており、概ね「荒砥」が#450～#700、「中砥」が#900くらいからで、#3000以上が「仕上げ砥」として使われる。使う前に砥石どうしを擦りあわせ「面直し」を行う。使っているうちに砥石面に凹みがでてくるので、その際は同じように「面直し」を行う。これは、面直しを施す砥石よりさらに荒い砥石を使って擦りあわせ、面を平らにする。ある大工さんに訊いたところによると、粗砥などはコンクリートのブロックでへこみを直すこともあるという。砥石の面に歪みや凹みがでると、刃が砥石面にうまくつかず、均等に研げないので必ず面直しをする必要がある。

目の細かさ		
荒砥	中砥	仕上げ砥
#450～700	#900～	#3000～

### 2 研ぎ方の基本

- 1) 砥石を水に浸け充分水分を吸わせる。砥石は、動かないようにしっかり固定する。
- 2) 砥ぐ準備ができたなら、刃物を研ぐわけだが、包丁などと違って切り出しナイフには刃に角度がついているので、その角度を維持しながら研いでいく。しゃくりあげたりしてはいけない。この角度を保って研ぐことがもっとも重要である。
- 3) しばらく研ぐと、刃に返りでてくる。つまり刃を裏から触ると引っかかりがあるのがわかる。これが返りである。返りができればきちんと研げている証拠でもある。これを裏表繰り返しながら研いでいく。  
なお刃のカケがあまりにもひどい場合は専門店で持ち込むことをお薦めする。

初めのうちはうまくは研げないだろう。が、数を重ねていくうちにコツが分かってくる。「荒砥石」「中砥石」「仕上げ砥石」を持っているにこしたことはないが、通常は「荒砥石」「仕上げ砥石」があればよいと思う。

以上が基本的な研ぎ方だが、とにかく馴れることである。初めのうちは刃の線がカーブしてくる。これは研ぐときに手前にしゃくりあげるからで、つねに砥石面に平行に動かしていれば、こうしたことにはならない。研ぎもコツをつかむことが大切である。言い過ぎかもしれないが、1本ダメにするつもりで取り組んでみてはいかがだろうか。



## <茶杓削りQ&A>

わからないことは、次のステップへの道標である

Q:近くに竹藪がないのですが、竹はどこで手に入ればよいのでしょうか。

A:竹材店、銘木店のほか、ホームセンターなどでも売られています。荒杓げは茶道 具店で扱っています。

Q:煤竹が手に入ったのですが、どうすればきれいになりますか。

A:水に数日浸けておき、古布で拭き取る方法、火で焙りながら拭き取る方法があります。火で焙る場合は、ガスでも炭でもかまいません。焦げるほど焙ると油がにじみ出てくるので、それを拭き取ればきれいになります。しかし、焦げるほどで、焦がしてはいけません。

Q:実竹という竹のことを訊いたことがありますが、どんな種類の竹ですか。

A:じつたけ、じつちく、みだけともいいます。マダケや孟宗竹のような竹の種類ではありません。竹の根が土中の岩盤などにあたり、それ以上伸びることができずに地上にでたものです。枝が1本で樋の深いのが特徴です。空洞となっておらず、また空洞があっても肉が厚く細い空洞があるだけです。

Q:荒杓げするために竹を割る場合、どれくらいの幅がよいのでしょうか。

A:樫先の幅は丸樫先で1センチ前後ですので、それが削れる程度の幅があればよろしいでしょう。

Q:竹を煮た方がよいのでしょうか。

A:荒杓げする前に、竹を柔らかくするために水につけますが、そのまま杓げる場合もあります。ただ煤竹やごま竹、染み竹などの場合は、煮た方がうまく杓がります。

Q:竹を煮るときには、水を差すのでしょうか。

A:鍋にたっぷり水を入れるので、その必要はありませんが、状況によって判断してください。

Q:煮る時間はどれくらいでしょう。

A:通常の鍋の場合、煤竹などで1時間30分以上。晒竹で40分以上がよい結果が得られています。圧力釜を利用すると煮る時間も短く、より柔らかくなりますので重宝します。

Q:杓げる時の道具はペンチでもよいですか。

A:専用の道具を作るのもよいですが、ペンチやヤットコでもかまいません。ただし、その場合、樫先にキズが付かないように長めに寸法を採ってください。もちろん、手で杓げすることもできます。

Q:きれいに杓がりません。折れる場合もありますが、うまく杓げるコツはありますか。

A:経験を積んでコツを会得するのが早道ですが、いくつかポイントはあります。はじめの準備段階で、杓げ軸の裏はなるべく平に削っておく必要があります。ろうそくで焙りながら杓げる場合は、はじめはゆっくりじわじわと。一点を過ぎると急速に竹が柔らかくなりますので、この段階で一気に杓げてください。他にもお湯に漬けながら杓げる方法や、蒸気を使う方法もあります。電子レンジで杓げる方法もありますが、1分以上加熱すると焦げますので注意が必要です。

Q:茶杓削り初心者です。削ってみたい樫先や形があるのですが、できますか。

A:もちろん可能です。が、はじめは基本を身につけるために、丸樫先、船底、中節の利体形を作ることをお勧めします。

Q:削っていくうちに細くなってしまいます。どこが悪いのでしょうか。

A:はじめのうちは削りたいラインを荒杓げに描くことをお勧めします。このラインより内を削らないようにすれば失敗は少ないでしょう。また、細い方から太い方へは削らないでください。竹の繊維はまっすぐに通っているので、細い幅のまま削ってしまいます。杓げ軸から切り止めへ、杓げ軸から樫先へ。これが削るときの基本です。

Q:できあがった茶杓は、後日、手直しをしないほうがよいのでしょうか。

A:通常、樫先と切り止めを仕上げたなら、それで終わりです。できるならそれ以上は直したくありませんね。もちろん気持ち的には手直しを・・・と思うときもありますが。

どうしても直したいと思う場合はすこし水でぬらしてから削ります。

Q: 樋は必ずあったほうがいいのですか？

A: 通常はあるのを使います。

Q: 樋があった方が価値があるのでしょうか？

A: 価値というより景色ではないでしょうか。

Q: 樋が無いのは茶杓としてあまり面白くないのでしょうか？

A: 全体的に景色があればそれはそれでよいのではないのでしょうか。

Q: 樋があるのをできるだけ探した方がいいのですか？

A: できればそのほうがよいでしょうね。

Q: 直径の大きい竹だと肉厚になって、蟻腰が作り易いと素人は考えますが、竹が太いと難しいですか？

A: 蟻腰は肉厚の材ではなく、節の高いものを使います。皺竹などは作りやすいでしょう。利休は実竹で作っていますが。

Q: 共筒の正面になる所には必ず樋がないといけないのでしょうか？

A: なくても可能です。わたしはよく樋のないものを作っています。もっともその分、景色がよいものを選びますが。

Q: 共筒の切り口はきれいな円になっていないといけないのですか？

また切り口が綺麗な円形では駄目なのでしょうか？

A: とくにそのような決まりは、記憶の中ではありません。

Q: 他の共筒を見ても切り口が「D形」になっていますが、何か意味があるのですか？

A: 竹の形状で樋があると必然的にそうなりますね。おそらく樋がないものだと、根に近い箇所を切り取ることになります。当然、肉厚が厚くなり、蓋と筒口をぴったりと合わせるのが困難になります。薄い方がやはり合わせるのには楽です。薄いところというと、やはり樋のあるところとなります。このあたりの理由ではないでしょうか。

Q: 蓋と筒の合わせめなんですが、隙間のないように作るのは、非常に難しいです。やはり、練習、熟練しかないのでしょうか？

A: 習熟するしかないですね。ノコギリの使い方が巧くなると巧く作れるようになりますよ。通常、市販されているものは旋盤を使っていますので、すきまなくできていますね。

Q: お茶杓なんですが、樋を全面に入れようと細い竹（約2cm）を選んで何本か作って見たのですが、厚みが薄くなりました。おかしいですかね・・・？

A: あまり薄いと貧相にみえます。それに樋が広すぎてこれもまたおかしいものです。

Q: 枉げなんですが、きつく枉げようと思って、枉げると割れるのですが何が悪いのですか？枉げ軸部分はフラットに削って、ゆっくりと枉げています。

A: 割れるというのは折れるということでしょうか？枉げ軸が裂けても、肉厚があれば問題ありません。

折れる理由は竹にもありますね。こればかりは理由はわかりません。よく水に浸けて、煮てみてはいかがでしょうか。熱いうちに枉げるとわりと曲がりますよ。

Q: 枉げをきつくするコツは、何かありますか？

A: 枉げの段階で直角近くまで曲げ、その後、紐で縛って固定するぐらいでしょうね。

Q: 共筒を削るときなんですが、水につけておいて削った方が、竹が軟らかくなって、削り易いように思えるのですがこれは間違いでしょうか？竹は、なるべく水に着けない方が良いでしょうか？

A: これも恐らくですが、水につけて乾燥するときに樋の部分が割れる可能性がありますね。

またサイズも若干縮まると思いますが。ということは、作った蓋が入らなくなるわけですね。

Q: 共筒は、根っこの方が蓋側に位置するとありますがその理由は为什么呢？

A: まず枝の切った残りが筒の低部にこないということですね。逆樋で使う場合だと、お



わかりのように枝が節のところに残ります。鋸削りにすれば同じだと思うでしょうが、節の断面を見るとわかりますが底部に枝の後が残ります。また切ったときに順樋で使用したときは節が平面（底のこと）で切断できます。逆樋だと少々凹になりますね。

**Q:順樋と逆樋について教えてください。**

A:これまで一般的に知られている順樋・逆樋は枝跡があり、天に向かって櫂先をとるのが逆樋。枝の裏側・地に向かって櫂先をとるのが順樋と云われていました。これは間違いではありませんが、厳密に言えば、このとり方をするのは石州流などの武家茶の系統です。千家流は、この逆とされています。これは利休が陰陽五行説を採用したからと考えられています。つまり竹や木は木・火・土・金・水からいうと陰の気になります。相克するためには陽の気をもってこなくてはなりません。つまり天に向けることによって陰陽を成り立たせたようです。

こうしたことから考えてみますと、順樋と本樋は必ずしも同じではないということです。それぞれの流派によって本樋はかわってきますので、流派の茶杓を削るときには注意が必要です。

千家流→順樋→櫂先は天に向けて→枝跡の残る面を使用

武家流→順樋→櫂先は地に向けて→枝跡のない面を使用

**Q:切り止めの形に決まりはあるのでしょうか。**

A:とくに決まりはありません。削った茶杓にふさわしいバランスのよい形で落としてください。種類としては一刀から五刀まで分けられ、三刀に両角を少し切り落としたものもありますが、これは五刀のうちにはいりません。

**Q:蟻腰は逆樋でもできますか。**

A:無理して削ればできないこともありませんが、通常は順樋で節の高い竹を用います。逆樋は枝があるため裏面が薄く、折れやすくなっていますので使いません。

**Q:荒杓の際、杓軸の裏にひびが入りましたが、削りに問題はありますか？**

A:それは杓軸の際に、竹の繊維が裂け、乾燥するに従ってそれがひどくなったものです。杓軸は削る部分なので、よほど深く裂けていなければ問題ははありません。ただし、縦にひびが入っている場合は、樋の部分が削っているうちにさらに割れてくる可能性もありますので、よほど注意深く削るか、漆で補強しないと使い物にならなくなるでしょう。

**Q:銘についてですが、どのようにつけばよいのでしょうか？**

A:銘は茶杓づくりにおいて、かなり重要な位置を占めています。銘ひとつでその茶杓のイメージが変わってしまいます。参考までにこれまでつけられた銘を列べてみます。

1. 花鳥風月からとった銘・・・「ほととぎす」「早蕨」
2. 茶杓のかたちからとった銘・・・「ゆがみ」
3. 禅語から引用した銘・・・「洗心」「素心」
4. 歌や句からとった銘・・・「有馬山」「玉緒」
5. 謡いからとった銘・・・「高砂」「二人静」

などがあります。

禁忌手としては「傷心」「失恋」などの生々しい銘はさけた方がよろしいでしょう。

作者のセンスが問われるものでもあるので慎重につけてください。